２年英語科の３学期評定

高橋　明浩

1　考え方

○　４月の授業開きにおいて、評定については次のようにプリントで説明してある。

・今年から英語の授業では、通知票に書いてある４つの観点（英語の場合、①コミュニケーションに対する関心・意欲・態度、②表現の能力、③理解の能力、④言語や文化に対する知識・理解）を何回かに分けてＡ（すばらしい）、Ｂ（だいたいよい）、Ｃ（努力が必要）というように先生が記録していき、それをもとにして５、４、３、２、１の評定を決めていきます。これまでのように「学年の中で５は何人、４は何人、・・・」というやり方ではなく、「ここまでできたら３」というようになりますから、がんばればがんばっただけ成績が上がることになります。もちろん、オール５をとることも全員が可能です。

・中間テスト、期末テストも上のように考えますが、成績の約50％の重みがあります。

・提出物（ワーク・ノート・レポートなど）、発言や発表、単語テストなども、Ａ・Ｂ・Ｃでつけていきます。Ａをたくさん集めると、評定の５がとりやすくなることでしょう。

2　テストから

○　100点満点で作成。大問ごとに３つの観点を割り振った。「関心・意欲・態度」はペーパーテストによる測定は不可能と思ったため、授業記録からのみ採用。

①　表現の能力をみる問題（条件英作文2問と、Q&A2問×最大6点）
（反応数2＋12点）÷14×100で「表現点」を計算。

②　理解の能力をみる問題（聞き取りと長文読解）
反応数25÷25×100で「理解点」を計算。

③　言語・文化の知識・理解をみる問題（適語選択、穴埋め、並べ替え）
反応数21÷21×100で「知識・理解点」を計算。

3　授業記録から

○　「理解の能力」「言語・文化の知識・理解」は授業記録を残すのが困難であったため、ペーパーテストからのみ採用。

①　関心・意欲・態度（100点満点）
ワーク（10点×2＝20点満点）＋単語テスト（1回10点×10回分の平均×4＝80点満点）＝100点満点。教科書3回以上忘れた場合は-94点（つまり、関心・意欲・態度は確実にゼロにする）。

②　表現の能力（105点満点）
授業の始めに行う会話（A+=5、A=4、B+=3、B=2、C=1）の平均×16
「私の好きなもの」英作文（A+=5、A=4、B+=3）の平均×5

4　観点別評価の算出

○　各観点とも100％表示になっていることから、テストと授業記録を採用する観点ではそれらの平均、一方のみの場合はそのままのパーセンテージで、80％以上をＡ、50％未満をＣとした。

5　評定

○　観点別評価（100％）の平均を取り、これに「私の好きなもの」の発表をした生徒に+2、冬休みの自由課題（クリスマスカード）を提出した生徒に+1を加えた。

○こうして出た点数を元に、次のExcelでの計算式において9段階の評定とした。
=IF(R3>=95,5,(IF(R3>=91,4.1,IF(R3>=80,4,IF(R3>=75,3.1,IF(R3>=50,3,IF(R3=45,2.1,IF(R3>=25,2,1)))))))　　つまり、４つの観点の合計が95％以上ならば５、90％以上で４◦、80％以上で４、70％以上で３◦、50％以上で３、45％以上で２◦、25％以上で２、25％未満が１。

○　さらに、３学期中に教科書を3回以上忘れてきた生徒（3回ごとに1ランク下げる旨をすでに言ってある）は１ランク下げた。

6　考察・反省

○　こうして評定を出した結果、評定の分布は次のようになった。

学期／評定	5	4	3	2	1
１学期	13（10%）	41（33%）	56（45%）	10（8%）	4（3%）
２学期	12（10%）	35（29%）	56（45%）	11（9%）	10（8%）
３学期	17（14%）	35（29%）	47（39%）	15（12%）	8（7%）

○　２学期に引き続き上位群が多くなりすぎたため、評定５の生徒は観点平均95％以上と、さらに高いカッティングポイントとなってしまった。一つ一つの活動に対する要求水準を前より高く設定したつもりであったが、中位～上位の生徒はますますがんばってしまう傾向にあり、結果として下位の生徒との差が大きくなっている。

○　数学科で１学期行ったように、全ての観点を合計してからパーセンテージで表示し、「〇％以上は5」などとやった方が生徒には説明しやすい。観点がオールＡなのに評定は４という結果が出ることについて、Aの中にも80～100まであるのであり、以下のような逆転現象が現れる可能性を生徒に説明した。（実際にある）

観点→	関心態度	表現	理解	言語文化	評定 (観点平均)
生徒A	A（100）	A（100）	A（100）	A（100）	5（100）
生徒B	A（100）	**B**（79）	A（100）	A（100）	**5**（94.8）
生徒C	A（80）	A（80）	A（80）	A（80）	**4**（80）

○　今回は活動ごとの重みづけは行ったが、観点ごとには行わなかった（４つの観点はどれも同じぐらい大切だと感じているため）。しかし、教科によっては重みづけが必要な場合があり、逆転現象がさらに大きくなる可能性を生徒に説明しておく必要があると考える（関心態度のみBの生徒は４、理解のみBの生徒は５など）。